

創世記1章1節「私は天地の造り主を信じます」

使徒信条を少しずつ学んでいきます。使徒信条は、現在伝えられている信条の中では、最も古いものです。今日と同じ形に固まったのは8世紀ごろですが、その元になったと考えられる古い形としては2世紀ごろまで遡ることができます。

1. 私は信じます

使徒信条は、ラテン語では「クレドー」ということばで始まります。「私は信じます」という意味です。

まず、主語の「私は」に関して考えます。もともと使徒信条の古い形は、洗礼を受ける人に対して、信仰告白を確かめるためのもでした。神様の御前に私が立ち、神様に対する私の信仰を告白し、神様の召しに私が応答するのです。こうして神様と私の関係が結ばれるのです。

このことは、教会として「私たちは信じます」と信仰告白する時にも、忘れてはならないことです。神様が一人ひとりを選び、招いて、契約を結んでくださいます。それに対して一人ひとりが主体的に応答します。そのようにして神様と契約を結ばれた一人ひとりが集まったのが教会です。ですから、礼拝で使徒信条と一緒に告白する時にも、一人ひとりが「私は信じます」と神様の御前に立つことが大事なのです。

次に、「信じます」に関して考えます。「神を信じる」というと世の人は、神の存在を認めるとか、神が応えてくれると期待するというように捕らえているでしょう。しかし、「信仰」とは、神様に信頼して、神様に自分を委ねることです。

また、世の人は、理性と信仰は相容れないという思い込みから、信仰を愚かなこととみなす傾向があるでしょう。確かに「イワシの頭も信心から」と言われることもあり、理性とは関係なくとにかく信じる心が大事だと考えられています。しかし、キリスト教信仰はそういう日本的な信心とは全く違います。

信仰とは神のことばから始まります。神様がみことばによって語り、それに人が応答することです。神様は人に理性を与え、自由意志を与えてくださっています。それらを用いて、みことばによって知らされている範囲においてよく知り、自ら応答して、信仰を告白し、自分自身を委ねることを神様は求めておられるのです。

しかし他方で、キリスト教の信仰は聖霊の賜物でもあります。信仰は、人の努力の結果ではなく、神様の恵みです。聖霊なる神様が人の心に働いて、人が自分の意志で、悔い改めて信仰を告白することができるようにしてくださるのです。信仰は神様の恵みであり、聖霊の賜物であることを感謝したいと思います。

もう一つ大切なことを確認したいと思います。信仰をことばをもって告白するということは、自分を神様に献げることであるということです。神様の恵みによって新しくされ、信仰を与えられて、告白するなら、そのことが生き方に現れてきます。「私は信じます」と心から告白するなら、その信じることに従って生きていくのです。信じて告白していることに真実に生きているかどうか、自らを顧みることができればと願います。

2. 天地の造り主

ラテン語でも英語でも、「私は信じます」の後に最初にあるのは「全能の父なる神」です。でもなぜか日本語訳では「天地の造り主」が最初になっています。今回は、日本語訳の順番で取り上げます。

元々は「全能の父なる神」とだけ告白して、後からそれに加えて、「天地の造り主」と告白するようになったようです。「全能」ということの中に「創造」も含まれると考えられますが、改めて加えたのです。

信条が整えられていった経緯には、教会が間違った教えに晒されることがあって、その中で正しい信仰を確認する必要がありました。使徒信条がまとめられた時代、ギリシア・ローマ世界では二元論が影響力を持っていました。二元論とは、世界が霊的なものと物質的なものから成り立っていると考え、霊的なものは善で、物質的なものは悪と考えました。ですから、神が無からこの世界を創造したとは考えられないことでした。しかし、そのような社会の中で、教会は聖書に基づいて、神が天地を無から創造したことを告白したのです。

時代はずっと後になりますが、進化論もキリスト教信仰に対する大きな挑戦となりました。それは今の日本においても同様です。この世界の存在を説明するには、突き詰めると二つしかありません。神が天地を創造したという創造論か、もう一つは進化論です。進化論は科学で、創造論は神話だと思い込んでいる人が多いと思います。そのような社会の中で、「天地の造り主」を信じますと告白することは非科学的なこととして低く見られるでしょう。しかし、聖書の神を知り、イエス・キリストを信じて救われると、聖書によって教えられている神による天地の創造についても受け入れられるようになります。

創世記1章1節。この世界が存在する前からおられた神様が、ある時点で、この世界を造られたのです。神様はこの世

界と時間を超えておられる方です。永遠無限のお方です。栄光に満ちた、尊厳ある神様がこの世界をお造りになったと宣言しています。ここで用いられている「神」ということばは複数形です。と言っても、神が複数いることを意味してはいません。この主語を受けている「創造した」という動詞は単数形です。この用法は尊厳の複数形と呼ばれています。尊厳ある恐れ多いお方のことを表現します。

偶然に世界が存在したのでも、偶然に生物が発生したのでもありません。尊厳と知恵と力に満ちておられる神様が、ご自身の深い計画と愛に基づいてこの世界を創造したと聖書は証言しています。

「天と地を」という表現は、両極端を挙げてその中の全体を指す表現で、この世界のすべてのものをという意味です。神様がこの世界の全てを造られました。ですから、この世界は神様の知恵で溢れており、神様のご性質が表されています。混乱はなく、美しさにあふれ、至る所で神様の愛を覚えることができます。

天地創造の記述は科学的な論文ではなく、文学的に書かれています。しかし、科学と矛盾しているということではなく、科学者の中にもクリスチャンは多くいて、聖書の記述が現代の科学で十分に説明できる、調和すると主張する人たちもいます。おそらく、さらに科学的な研究が進んで世界の成り立ちが解明され、また、聖書の言語の研究が進んで正しく釈義できれば、もっと聖書の記述と科学が調和して、的確に説明できるようになることでしょう。

何れにしても聖書の主張ははっきりしています。神様がおられて、この世界とそこにあるすべてのものをお造りになり、そして、ご自身に似た存在として人を造られたのです。ということは神様は、ご自身が造られたすべてのものに権威を持っておられ、ご自身が造られたすべてのものを愛しておられるということです。

また、神様はそれぞれのものをどのように造られたのでしょうか。私たちが何かを作るときには材料や道具が必要ですが、神様はみことばによって、何もないところから、この世界の全てをお造りになりました。「神は仰せられた」、「すると、そのようになった」と1章に繰り返し記されています。神様が語られると、必ずそうなるのです。改めて、聖書のみことばの偉大さとその権威を思います。聖書のみことばは、天地の造り主である神様の仰せと同じです。その神様のみことばを私たちが聞くことができます。そして、私たちは神様が与えてくださる一つ一つのみことばによって生きることができます。

詩篇 121 篇 1～2 節。表題にあるように「都上りの歌」の一つです。エルサレムに向かいながら、周囲の山々を見上げて、「私の助けは どこから来るのか」と問います。答えは明らかです。「主の山」からです。エルサレムの宮にご臨在を表される主なる神様から助けが来ると信仰を告白しています。なぜなら、主は「天地を造られたお方」だからです。

天地を造られた神様は、この世界をはじめから終わりまで統べ治めておられます。この世界を創造した後は、自然法則などに任せて、世界に興味を失って、離れてしまっているではありません。神様はこの世界を御心のうちに治め、また一人ひとりに目を留めておられます。神様が人を創造し、一人ひとりにいのちを与えてくださったのですから、私たちに對する神様の深いみこころ、計画があり、神様が導いておられるのです。私たちが経験することは神様が配慮し導いてくださっているということです。悲しみや痛みの経験でさえも、すべて私たちが造られた神様の御手の中にあることであり、尊い経験でもあるのです。

そして、神様は助けを与えてくださるお方です。この 121 篇には主が守ってくださると繰り返し告白されています。「私の助け」であるお方に目を向けているなら、「まどろむこともなく 眠ることもない」主が確かに守ってくださいます。「天地を造られたお方」から目を離すことがないようにと教えられ、勧められています。

礼拝で共に告白する時にも、「私は信じます」と神様の御前に一人ひとりが立つことを意識しましょう。また、「信じます」と告白することを、みことばによってさらに知り、信頼し、自分を委ねましょう。私たちが信仰を告白することができるのは、神様の恵みであり、聖霊の賜物であることを感謝しましょう。そして、「信じます」と告白することが生き方に現れているか、自らを顧みましょう。

聖書に基づいて私たちは、神様が天地の造り主であることを信じています。何もないところから神様がみことばによって天地万物をお造りになりました。人をご自身のかたちとして造り、私たちそれぞれにいのちを与えてくださっています。それゆえに神様はすべてのものに権威を持っておられ、一人ひとりを愛してくださっています。その神様を賛美しましょう。神様の権威あるみことばに聞き、その愛を受け取りましょう。

神様はこの世界の全てを御手のうちに治めておられ、守ってくださる方ですから、主から目を離さないでいましょう。置かれる様々な状況の中で、「私の助けは主から来る。天地を造られたお方から」と信頼して、祈り求めましょう。